

殉教か生命の尊重か

—ラビ・ユダヤ教の人間理解—

市川 裕

東京大学・大学院人文社会系研究科 助教授

昨年来、アラブ系のイスラム教徒による「殉教」が叫ばれる事件が起こっているが、キリスト教やイスラム教において顕著な殉教という観念の起源となったものに、ユダヤ教徒による殉教、即ち「主の御名を聖別する」観念がある。命がけで神の教えを守るという切迫した状況は、他方で、人間の生命の尊重という考えを深く省察するきっかけを与えたようにも思う。そこで、ユダヤ教の事例を手がかりにして、殉教と生命の尊重という、ある意味で対立する価値の拠ってたつ基盤を考えてみたい。

西暦紀元70年のエルサレム第二神殿破壊ののち、ユダヤ人は武力をもたない無力な寄留民となり、宗教的政治的な迫害を繰り返し蒙った中で、いかなる対応を示してきただろうか。これについては、わたしは以下の3つの教えがユダヤ教の原則的な教義であると認識している。

第一は、残りの民へ希望を託すこと。これは既にモーセ五書（トーラー）の成立のもとになったバビロン捕囚のころまで遡りうる教えである。元来は、神に背いた罰として国は滅びても、生き残った者の悔い改めによって神の救済が待望できるという枠組みで理解されるが、神の教えを歩んで久しいユダヤ人が、ショーアーによって絶滅されそうになった現代の経験はきわめて深刻である。神はなぜショーアーを許したのかという問い、絶滅されないための祖国建設は、これと連動している。

第二には、生き残った者は歴史の証言者たれ、という教えである。これも古くはトーラーの教えに遡り、新しくは、エリー・ヴィーゼルに代表されるように、ショーアーの生存者にその使命を自覚させた教えである。申命記4章9節に曰く、「ただひたすらに注意してあなた自身に十分気をつけ、目で見たことを忘れず、生涯心から離すことなく、子や孫にも語り伝えなさい」と。ヴィーゼルは自伝の中で、歴史の証人の重要性を語っている。いかにすぐれた裁判人がいても真実が失われては裁きが行えない。真実が失われ

なければ、いつか必ず正しい裁きは下されるであろう。だから、大切なのは真実を証言する証人になることであると。

第三には、過度の殉教を抑制し生き残ることを重視すること。これは、殺人の強要、偶像崇拜の強要、禁じられた性的関係の強要以外には、ユダヤ教の戒律を破ってでも生きることを優先させる。この教えが明瞭に表明されているのは、西暦70年以降にユダヤ人社会を指導していくラビたちの教義を記録した口伝律法集である。そこでは、神の教えであるトーラーを引用して、その教えの根拠が示されているが、それは文脈に沿った字義通りの解釈ではない。すなわち、レビ記18章5節に「わたしの掟と法を守りなさい。これらを行う人はそれによって命を得ることできる。わたしは主である」と書かれているため、神の掟と法は、生きるためにあるのであるから、もしそれを行うことが命の危険を伴うのであれば、例外を除いて、命が優先されるという解釈である。その例外が、上に示した3つの重大な戒めである。

第一と第二に関しては、強大な帝国に翻弄された弱小の民イスラエルが、古くから体験してきた精神が反映しているのに対して、第三点は、なんらかの特異な時代状況に由来する思想である。この教えが出てくる背景に、殉教を賞賛するような時代精神があったのではなからうか。それを確認してみたい。

殉教、あるいは殉国を誇り高い行為とみなす立場からの記録は、エルサレム第二神殿時代から伝えられている。殉教という概念は相手側に何らかの強制的な思想があることに応じて成立したのであり、その対立概念がなんであり、それがいつどこで実践されたかを同時に考える必要がある。また、誰がどういう観点からそれらを記録に残しているかも、あわせ考えねばならない。

殉教が記録されている最初は、旧約聖書外典の「第二マカバイ記」である。ここでは、シリアのセレウコス王朝の王アンティオコス4世エピファネスが、神殿を略奪しユダヤ人に異教の礼拝を強要し、またユダヤの掟を破るよう強要し無理やり豚肉を食べさせようとして、それを拒んだ律法学者エレアザルが進んで殉教し、さらにユダヤ人の七人兄弟の殉教が続いたことにより、マカベアの反乱を引き起こすきっかけとなったものである。相手側は、未開文化をギリシャ化し啓蒙するというヘレニズムの高い理想を実行に移したという面があり、それを受け入れないユダヤ人は頑迷固陋な民ということになる。

さらには、ローマ帝国がユダ地方を支配して以来、エルサレム神殿にローマの宗教の偶像を持ち込もうとし、各地のユダヤ人の宗教感情を冒瀆する行動が昂じたことが原因

のひとつとなって、西暦66年に、ローマを相手とした第一次ユダヤ戦争となる。この間の事情は、当時の神殿祭司貴族のエリートであったフラヴィウス・ヨセフスの「ユダヤ戦記」に詳述されている。とりわけ、エルサレム崩壊後も徹底抗戦し、死海沿岸のマサダ要塞にこもったユダヤ急進派のシカリ党が千人近く自害する事件があり、総帥の演説によって、その行為が、隷属よりも自由を選択するという思想に鼓吹されたものであることが知られる。ここでも、相手方からすれば、ユダヤ人は、ローマの平和を脅かす頑迷で好戦的な被支配民とみなされ、ローマ軍による徹底した殲滅の対象とされた。

古代において、殉教の最後を飾るのは、第二次ユダヤ戦争と呼ばれるバルコホバの反乱である。ラビ文献は、反乱自体を否定的に捉えながらも、反乱鎮圧後のラビたちの行動を殉教として描いている。ローマがユダヤ教を禁止した中で、多くのラビが禁令を破ってユダヤ教の教えを実行し、そのかどで処刑された事件を基礎にして、「ローマ帝国に殺害された十人の賢者」の物語を編んで、後世に語り伝えたのである。この話は、中世ヨーロッパのユダヤ人が十字軍による迫害を受けたとき、彼らの精神的支柱としてユダヤ人であることに誇りを見出すのに寄与したといわれる。

ここに挙げた事例は、ヘレニズム・ローマの強大な帝国による侵略行為による国土喪失の危機と結びついて出てきた思想の実践であり、宗教的アイデアが祖国滅亡の政治的危機と結びついて、殉国と言う側面が強くて出ていることは否定できない。

ラビ・ユダヤ教は、ラビたちの殉教を後世に伝えつつも、「殉教」に制約を加え、決して賞賛していない。しかも、上記のマカバイ記を正典から除外し、祭司階級の権威を失墜させた。ラビたちがそうした立場を選択した理由は、祖国滅亡・神殿崩壊という生存の危機に発する殉教・殉国の強烈な精神が悲惨な結末をもたらしたことへの厳しい批判にあったことが了解される。しかし、ここでは、殉教に対する異なった見解をタカ派かハト派かという政治的レヴェルの問題としてではなく、ラビたちがなぜ人命の尊重に価値を置いたのか、その根底にある人間理解が注目される。さきに、迫害を生き延びて使命を自覚し歴史の証言者たれ、というユダヤ教の教えに触れたが、真実が明らかになるか否かは証人の存在にかかっているという事態は、あらゆる日常生活の局面で言えることである。そもそも、聖書が十戒のひとつに偽証の禁止を置いているのは、聖書の民が、裁判における正義の実践を神の正義の実現に不可欠なものと認識して、その価値を標榜したことを意味する。ラビ・ユダヤ教はその聖書の精神を継承し証言の意義を深く認識

した。そのことは、ミシュナのサンヘドリン篇における証人の規定に確認することができる。

ミシュナの規定には、金銭裁判の場合と人命裁判の場合に、それぞれ証人に関する規定が定められているが、いずれにおいても、裁判人は証人を一堂に集めて偽証をしないよう威嚇することが義務付けられている。

金銭裁判については、ミシュナ（サンヘドリン3：6）は「裁判人は証人を一堂に集めて偽証しないよう威嚇する」とだけ定め、内容は記されていない。それを受けて、ゲマラは、どのように威嚇するかについてラビの議論を伝えている。それによれば、証人が偽証しないために最も効果的な威嚇とは、「偽証すると天変地異が變う」とか「戦乱が起こる」とかではなく、「偽証人は偽証を依頼した人間からも軽蔑される」という、人格に訴える威嚇が最も効果的であるという結論を導いている。

これに対して、人命裁判における証人の威嚇は、詳細に述べられている（サンヘドリン4：5）。「推量から、噂から、他の証人の伝聞から、あるいは信頼できる人の口（から出たことば）から、ものを言わないよう」威嚇される。「最後にはあなたがたはわれわれによって厳しく尋問され調べられることを知らねばならない。」そして、「人命裁判は金銭裁判とは違うということだ。金銭裁判なら、人（偽証人）は金銭を支払うことによって償いができるけれども、人命裁判ではその人の血とその子孫の血とが世の終わりまで証人の肩に懸かっているのだ」と。こうして、神がアダムというただ一人の人間から人類を創造したことの意義が教訓的に語られる。「一人のイスラエル人の命を救うことは世界全体を救うことを意味し、一人のイスラエル人の命を奪うことは世界全体を滅ぼすことを意味する」と。そして、「各自は、自分のために世界は造られたと言うべきである」とさえ述べる。最後に、予想される無関心な態度に対する訓示がくる。「どうして私がこの災難を受けねばならないのか」と、殺人の証言をする災難を嘆く者がいたら、その者に対しては、トラーを根拠に「見たり聞いたりした事実を証言しうるのに、なおそれを告げずにいる者は、罰を負う（レビ記5：1）」と語る。そして、「いったいどうして私がこの人の血の責任を負わねばならないのか」と言う者に対しては、箴言を引いて、「神に逆らう者が滅びれば（町は）歓声をあげる（11：10）」と戒めるのである。

人間が神の似姿として創造の賜物であるか否か、この世界に神の正義が実現するか否かは、ひとえに一人一人の人間の行為にかかっている。ここに、ラビ・ユダヤ教の厳粛な人間理解の表明を見て取ることができる。